茨姫

水都　サリホ

《登場人物》

男
女
医者
看護婦
父　女の父
母　女の母

小林　少年探偵団
井上　少年探偵団
野呂　少年探偵団

女子高生
宇宙飛行士

※騎士1、2、3とタイ人1、2、3は少年探偵団役が演じることを想定しています

《あらすじ》

男の弟が、徐々に体が植物化してゆく病気、冬虫夏草症を発症する。男は弟の付き添いで行った病院で、重度の冬虫夏草症患者である女に出会う。女の体は半分以上植物化し、殆ど眠って過ごしている。女は八年間入院しており、父母も訪ねて来ない。

女は入院前に遠足で行った水族館で、閉じ込められた魚や鯨を可哀想に思い、逃がしてやろうと忍び込んだ過去がある。病院から出られなくなってからは、閉じ込められた魚を自分と重ねあわせ、いつも夢の中でだけでも海に逃がしてやりたいと願っている。

男は女と親しくなり、女が目覚めている時間も長くなる。しかしそれに連れ、冬虫夏草症の感染者も増加してゆく。

男は弟の薬代を払い続ける為に、タイに転勤する条件を呑む。

男がタイに行ったあと女の病気は進行し、町全体を覆いつくす。女は、茨に覆われた町の中で、水族館の魚を逃がしに行く。

タイにいる男は、ニュースでそれを知り、夢の中を通って女に会いに来る。

二人が水族館から鯨を逃がすと、女は自分の茨を全て枯らし、死ぬ。

○一、夕暮れ

騎士役の小林、井上、野呂が登場する。

小林　美しい夕暮れ。
井上　ターコイズの空を、薄桃色とオレンジ色とが次第に侵食してゆく。
野呂　水面も柔らかなオレンジに染まり、世界は祝福されているようだ。
小林　けれど、騎士2と騎士3よ、あの湖の向こうの、茨に囲まれた城の中には、呪いを掛けられたお姫様が眠っているのだ。
井上　なんだって、騎士1。
野呂　呪いとはどのような呪いなのだ？
小林　真実の愛が見付かるまで、死んだように眠り続けるという呪いだ。
井上　なんと・・・判定者の匙加減ひとつっぽい呪い！！
小林　夢の中で、姫は僕らを見ている筈だ。さあ、手を振ろう。夢の中の姫に。

小林、井上、野呂、「姫―」「ナイストゥミーチュー」「やっほー」など、適当なことを言いながら、手を振る。

井上　お姫様も夢の中でこの夕焼けを見ているのであろうか、騎士1よ。
小林　多分ね、騎士2よ。
野呂　一体どんな気持ちだろう、騎士1よ。まあ綺麗、って思っているのであろうか。或いは、マジムカつくと思っているのであろうか。
小林　騎士3よ、それを知るには、お姫様の呪いを解いて聞いてみるしかない。では王子！

男が登場する。

男　え、俺？
小林　いかにも。
井上　さ、真実の愛を発動して、お姫様をとっとと助け出してください。
男　とっとと、って言われても。

小林、井上、野呂、「真実の愛！真実の愛！」と手拍子付きでコールする。

男　そんな気軽な感じで言われても。眠ってるんでしょう？！見ず知らずの上に意識のない人との間に、どうやって真実の愛を成立させろと？
野呂　だってお姫様ですよ？
小林　そしてあなたは王子様だ。

井上　真実の恋をするのが筋ってもんです。
男　そもそも真実の愛ってなんだよ。
野呂　混じりけない愛です。
小林　真実の牛肉は牛肉百パーセント。
井上　真実の牛乳は牛乳百パーセント。
野呂　真実の牛タンは牛タン百パーセント。
男　牛以外のものでは真実を表現出来ないの？
小林　だから、牛から類推するに、百パーセントの愛が、真実の愛です。牛乳などが混ざっていてはいけない。
男　牛乳とかは、まあ多分混ぜないけど。
小林　ならば、呪いを解いてください。
井上　お姫様を助け出すのです。
野呂　真実の愛によって！

小林、井上、野呂、退場する。

〇二、診察室
医者が登場すると、診察室。

男　あの。どうでしょう。ユウトは。
医者　冬虫夏草症ですね。
男　冬虫夏草症。
医者　ご存知ですか？
男　ええと、あの、十年くらい前に大騒ぎされたあれですよね？なんか、植物になっちゃうっていう？えーと、でもそれは、もうなんか、治療法が見つかったみたいな感じのニュースが流れて。
医者　治療法と言って良いのか。完治はしません。まだ完全な治療法は発見されていない。ただし、投薬により植物化を遅らせることが出来ます。
男　え？遅らせるだけですか？
医者　ええ。でも、物凄く遅らせますから。
男　ああ。
医者　普通に生活し、普通に長生きできますよ。
男　あ、そうなんですか。
医者　はい。薬を飲み続ける限り。
男　えー。いつまで？

医者　一生です。
男　一生。え。一生って・・・一生ですか。
医者　他に方法が無いので。薬を飲まないと病状は急激に進みます。一年から二年程度で体の自由は利かなくなり、五年から十年ほどで完全に植物化します。
男　あ、はあ。
医者　それで、言いにくいのですが、この薬は大変高価で、ひと月に二十万円ほどかかります。
男　え？
医者　健康保険を使えば三割負担で六万円、更に市に申請すれば医療費の免除が受けられ、それで自己負担は二万円ほどになります。
男　あ、はい。
医者　毎月二万円を払い続けるのはご負担でしょうが、薬を飲まないことは弟さんにとって死と同義語です。どうかそれをお忘れなく。ご両親にもしっかりご説明下さい。
男　あ、はい。
医者　点滴が終わっても、今日はこのまま入院です。お兄さんはどうします？病室に行かれますか。
男　はい。
医者　１０１２号室です。十階の。奥の、緑のラインの入ったエレベーターから向かって左の廊下をまっすぐ行って、途中渡り廊下がありますから、渡って、そこを左で、その突き当りです。
男　ええと。
医者　途中、案内図あるから、それ見て下さい。
男　はい。
医者　じゃ。

医者、去る。
室内が薄赤く染まる。
男、きょろきょろしながら去る。

○三、少年探偵団
小林、井上、野呂の三人が各々懐中電灯を照らしながら登場する。
少年探偵団なので、半袖半ズボンで、少年的な格好をしている。
小林の首には、双眼鏡。

井上　小林君。

小林　何。着いた？
井上　いや。ごめん、ここ多分、水族館じゃ全然無い。
野呂　ああ！・・・ああ！
小林　何、ああ、って。
野呂　だからさっきから、手術室やリハビリ室があるんだ！
小林　え？何で早く言わないの。
野呂　うん。随分自由な感じの水族館だなとは思ったんだよね。
井上　可笑しいでしょ。水族館に手術室ないから。
野呂　でももしかしたら、魚の手術室かもしれないでしょう。
井上　魚は手術しない。
野呂　するよ。魚も病気になるよ。
小林　でもリハビリはしないよ。
野呂　リハビリ室というプレートを利用した、道案内かもしれないでしょう。
井上　道案内に利用できるツールは、リハビリ室のプレート以外に山ほどあるよ。
野呂　じゃあ何なら良いんだよ。
井上　バラとかユリとか金木犀とかチューリップとか。
野呂　花ばかりだと、皆、水族館じゃなくて花屋だと思うよ。
井上　じゃ、パン。
野呂　パンか。
小林　パンも目印にはしないよ。とにかく、迷ったんだね？ここは水族館じゃないんだね。
　手術室やリハビリ室があるからには病院だよね？井上君！

井上、地図を調べる。

井上　うーんと、・・・こっち行ってあっち行って、ここで、あ、ここで右に曲がっちゃっ
　たから・・・ああ！！
小林　今度は何。
井上　これレインボー水族館じゃなくて、明智先生のうちから駅へ行く地図だ。
小林　何故今までそれに気がつかない。え？じゃ、今どこ？
井上　それは永遠の謎だよ。
野呂　迷宮入りだね・・・水族館なだけに。
小林　何とも掛かってない。うまいこと言ってる風に言っても、何一つ言えてないよ。
野呂　でも、本当にレインボー水族館に行けば、明智先生が見付かるの？
小林　多分ね。
井上　多分か。
小林　今はそれしか手掛かりはない。二十面相は次元の裂け目をかいくぐり、どこか別の

世界へ抜け出した。明智先生はそれを追って行ったはず。
野呂　次元の裂け目はレインボー水族館にあるの？
小林　明智先生の本棚には、「水族館ぴあ」と「るるぶ水族館」があり、レインボー水族館のページにのみ赤いマルが付けられていた。
井上　それ、自分が遊びに行く予定だっただけじゃない？
小林　そんなことない！！だって僕誘われてないから！
野呂　小林君、明智先生にだって君以外の人間関係があるんだよ？
小林　ないよ！名探偵の日常は、事件事件僕事件二十面相僕事件犬僕僕だよ！
野呂　小林君、自意識過剰だよ。
井上　あれ、犬飼ってた？
小林　シェパード。
井上　え？あれ飼い犬だったの？
小林　犬にはそんなに喰いつかなくて良いよ。とにかく、手掛かりは、ぴあとるるぶしかないんだ。僕らはレインボー水族館を目指すんだ！

少年探偵団退場。
入れ替わりに、キョロキョロしながら男が登場する。

○四、女の病室
扉を開けると、女の病室。
ベッドの上に、眠る女がいる。首から下は掛け布団に覆われ見えない。
男、恐る恐る近付く。女、目を開ける。

女　誰。
男　あ、いや。ごめんなさい。
女　新しい先生？
男　違います。１０１２号室を探してて。部屋を間違えました。ごめんなさい。ここは、ええと、何号室？
女　分からない。
男　え？
女　部屋番号。忘れちゃった。
男　忘れた？
女　何号室だっけ。
男　あの。失礼しました。あの。ずっと入院してるの？
女　うん。もうずっと。小学校の卒業式の少し前から。

男　え。そんなに？
女　そんなに・・・なんだよね。ずっと眠ってるから、いまいち実感が沸かないけど。
男　そんなに悪いの？
女　うん。

女、掛け布団を取る。
女の身体は蔦に覆われ、腕や脚から葉っぱが覗く。

女　冬虫夏草症。
男　冬虫夏草症。
女　体がちょっとずつ草になっちゃうの。

男、女に近付こうとする。

女　離れて。駄目だよ。感染るんだ。なんか、先生と看護婦さん以外の人と、久し振りに会話した。そろそろ出て。感染ると困る。
男　うん。
女　バイバイ。

男、行きかけるが、

男　あの。君の名前は？
女　薔子（しょうこ）。

暗転。

○五、診察室
明転すると、医者が椅子を持って登場し、座る。
看護婦が登場する。

医者　何時。
看護婦　一時半です。
医者　君も休憩に出て良いよ。
看護婦　先生、まだ。

医者　え?今の竹下さんで終わりだろ?
看護婦　いえ。蔓原さんが。
医者　ああ。

父が登場する。

父　先生、どうも。御無沙汰しております。
医者　ああ、はい。

医者、看護婦に、

医者　君は良いよ、休憩行って。
看護婦　でも。
医者　良いから。
父　どうぞどうぞ。私ならお気になさらず。
看護婦　はあ、では・・・失礼します。

看護婦、去る。と見せかけて、壁に張り付き、舞台の隅で盗み聞きをする。

医者　もう、ひと月経ちますっけ。
父　ええ。もうすぐ春ですね。
医者　そうですね。
父　恋をしてみませんか。
医者　結構です。

医者、周囲を見回し、看護婦に気が付く。

医者　遠藤君。

看護婦、医者と共に辺りを見回す。

看護婦　遠藤さーん。
医者　君だ、君。そんなところで何してるんだ。
看護婦　ちょっと忘れも・・・盗み聞きです!!
医者　言い訳は最後までしてから開き直れ。盗み聞きはするな。
看護婦　盗み聞きという名のそよ風です。

医者　出て行きなさい。
看護婦　すごく聞きたくても？
医者　すごく聞きたくてもだ。
看護婦　ちっ・・・つれいします。

看護婦退場する。

父　今のは？
医者　ああ、新しい看護師です。ちょっと変ってるんです。
父　まあ、それは一瞬にして気が付いたけど。

医者、退場し、すぐに戻ってくる。手には封筒。父に封筒を渡す。

父　どうも。ありがとうございます。

父、恭しく封筒を受け取る。

医者　中身、ご確認下さい。
父　とんでもない。信用してますから。
医者　会って行かれますか。
父　いや。どうせ眠ったままだからね。
医者　そうですか。
父　ええ。じゃ、また来月。
医者　ええ。

父、去る。
医者、逆方向に去る。

○六、病院の屋上
女子高生が登場する。
しばらくして看護婦が登場する。

看護婦　あ。こんなところに。駄目でしょう。部屋に戻って。何の為に入院してるんですか。
女子高生　何の為に入院してるんですか？

看護婦　え？
女子高生　私、何の為に入院してるんですか。
看護婦　絶対安静だから。
女子高生　どうして安静にしなきゃいけないの。
看護婦　出血あったでしょう？
女子高生　そのままで良かったのに。そしたらこんなに、悩まなくて良かった。
看護婦　それで、動き回って、駄目になるのを待ってるの？
女子高生　そういうわけじゃないけど。
看護婦　だったら、病室に戻って。
女子高生　なんだか面倒。色々。
看護婦　死んでも良いことないからね。念の為、先に言っておくけど。
女子高生　死んだら良いも悪いもないよ。
看護婦　ああ、まあ、それはね。
女子高生　別に死なないけどね。
看護婦　まだ若いんだから。
女子高生　だから？
看護婦　死ぬ気なら、その若さ私に吸い取らせるか分けるかしてからにしてくれない？
女子高生　自分勝手すぎて怖い。
看護婦　じゃ、早く病室に戻って。
女子高生　はーい。

女子高生、看護婦に連れられて退場する。

〇七、病院前の公園
母が登場し、椅子に座る。母の手には人形。
父が登場する。

父　おい。
母　あら。早いのね。
父　帰るぞ。
母　もう少し。開いてる窓が、七つになるまで。
父　何なんだ、その自分ルール。
母　あの左端の部屋、あそこね、子供が入院してるみたいよ。さっき、窓に顔貼り付けて外を見てた。
父　ふーん。

母　どんな気持ちかしらね。閉じ込められて、ずーっと外を、外の楽しげに歩いたり走ったりフリスビーしたりする人を見る気持ちって。
父　お前、ここに来るたび同じ様なこと言うな。
母　ここから見ると、蜃気楼みたい。
父　え？
母　病院。

母、人形を顔の横に掲げて外を見せるようにする。

母　しょこたん、ほら、見える？ね。
父　あそこに本当にいるのかね。
母　何が？
父　何が、って。
母　え？何が？
父　いや。
母　変なパパ。ね、しょこたん。あ。しょこたん、今年成人式でしょう。振袖買ってあげなくちゃ。ね。一緒に見に行かない？
父　一人で行け。
母　どうせパチンコでしょう。
父　うるせえよ。

父、病院を見て、

父　死んでしまえば諦めもつくのに。
母　え？
父　先、帰るわ。

父、去る。
母を残したまま、舞台暗くなる。

○八、病室
舞台明るくなると、女が眠っている。
男が登場する。手には紙袋。
男、小声で、

男　薔子さん、薔子さん。

女、目を覚まし、ゆっくり起き上がる。

女　小野君。
男　こんばんは。
女　ああ、今、夜？
男　あ、うん。
女　見つからなかった？
男　うん。あ、これ。

男、紙袋から本を取り出し、女に渡す。

男　好きって言ってたから。

女、本を捲る。鯨やイルカ等、海の中の生き物の写真集。

女　わー。わー。わー。
男　あと、これ。

男、袋からプリンを取り出す。

男　えーと。食べられるかな？
女　プリン？！
男　うん。
女　えー。えー。えー。あのプリン？卵と牛乳で作られているという、あのプリン？
男　ああ、まあ、そのプリン。
女　うわー。ありがとう。うわー。すっごくすっごく好きなの。
男　良かった。
女　食べる。あ、小野君は？
男　いや、僕はいいや。
女　私だけ？
男　気にせず食べて。
女　うん。ありがとう。

女、プリンを食べ始める。食べながら、

女　あー。久し振りに固形物食べた。
男　プリンはそれほど固形じゃないけど・・・え？いつも、食事は？
女　しない。
男　え？だって。
女　基本光合成。足りない分は点滴。
男　じゃ、食べて大丈夫？
女　それは、まあ、多分大丈夫。ああ、そうだ。味って、こういう感じのものだった。わー。
男　お腹は、空かないの。
女　基本寝てるし、空かない。でも、食べるって嬉しいね。
男　あの。今度また、何か持ってくるよ。何が好き？
女　今、頭の中も口の中もプリンで一杯過ぎて、他の登場人物の入り込む隙間無い。
男　甘いものと、おにぎりとかそういうんだったら？
女　どっちも好き。っていうか、食べられるものなら何でも。
男　あ、うん。

女、プリンを食べ終わる。

女　美味しかった。ああ。そうそう。美味しいってこういう、こういう気持ちだった。ご馳走様。
男　いや。

女、再度本を手に取り、捲りながら、

女　私、水族館に行ったの。小学校の遠足。
男　うん。
女　五年生だった。すごく大きな水族館でね。出来たばかりで。知ってる？レインボー水族館。
男　ああ、うん。行ったことないけど。この近くだよね？
女　うんそうそう。マンタ、分かる？そこにマンタがいたんだよ。
男　えーと。でっかいエイみたいなやつだよね、確か。
女　そうそう。それ。それから、鯨もいたの。
男　鯨？あ、そうなんだ。すごいね。
女　うん。すごかった。他にも、シャチとか大きいのがいてね、イルカとアシカのショーがあってね。すごく面白くて、すごく綺麗で。
男　うん。

女　でも、なんか、イルカのショー見てたら、何か、なんかちょっと、すごく、可哀想っていうか。
男　可哀想？
女　うん。あのね。例えば、私が、すごく知能の発達した、魚類の進化した星に住んでるか、もしくは水の中で生きるタイプの宇宙人に捕まったとしてね。
男　うん。・・・ええ？！
女　で、水の入らない水槽・・・水槽じゃないけど、ガラス張りの檻に入れられて飼われるとしてさ、エサをもらえる代わりに、他の生き物に襲われない代わりに、その、檻の中だけでしか生きられなくて、飛んだり跳ねたり、芸をしなくちゃいけなくて、ずっと進化魚類か宇宙人に見られてばかりで、落ち着かないだろうし、厭だろうなって思って。
男　ああ、まあ、それはね。
女　鯨もマンタもシャチも皆、窮屈で詰まらないだろうと思って。海に比べたら、水槽の中すっごく狭いだろうし。私本当に、宇宙人には捕まりたくないなー、って。
男　僕も宇宙人には捕まりたくないけど。
女　うん。だよね。
男　うん。
女　この写真、海の中を泳いでるやつだね。良かった。とっても嬉しい。
男　うん。ええと。あの。次は、花とか持ってくるから。
女　あ、駄目駄目。置いておけない。あると見つかっちゃう。
男　ああ、そっか。
女　ていうか、小野君も、駄目なんだけどね、本当は、来ちゃ。
男　大丈夫だよ。
女　いや、うつるよ、油断してると。
男　うつるの？
女　わかんないけど。先生がそう言ってたよ。
男　冬虫夏草症に罹るのは、年間せいぜい、二、三人くらい。今、患者は日本に百人くらいしかいないんだよ。
女　えー。そうなの？よく知ってるね。
男　弟も冬虫夏草症なんだ。
女　え。
男　この間、検査で分かった。間違えてここに来ちゃった時、その説明聞きに来てたんだ。
女　あ、そう、なんだ。
男　うん。だから、まあ、何ていうか、親近感？
女　怖くないの。
男　え？
女　弟さんのこと。だって、うつるかもしれないのに。

男　いや、あまりにも身近じゃない病気過ぎて、怖いとかも思えない。あ、ごめん。
女　いや、それは別に。
男　それに、薬飲んでれば、普通に暮らせるって言うし。
女　薬？
男　うん。
女　そっか。
男　だから、あの、大丈夫。ここに来ても。うつるなら、弟からだってうつるし。
女　うん。ありがとう。

女、ベッドに身を預ける。眠そう。

男　あ、眠い？
女　うん。
男　あの、また来るから。
女　うん。

男、去りかける。

女　あのね、多分、プリンの夢を見ると思うよ、私。
男　うん。
女　あと、鯨と。
男　うん。
女　鯨に乗ってプリン食べる夢を。
男　限定しすぎ。
女　バイバイ。
男　また来るよ。

男、去る。
女を残して、舞台暗くなる。

〇九、少年探偵団

舞台前方だけ薄明るくなり、少年探偵団が登場する。

井上　小林君。さっきから同じ様なところぐるぐる回ってない？
野呂　まるで人生のように。

小林　例えるな。井上君、地図見て地図！
井上　でもこれ駅前の地図だから。
小林　ああ、せめてるるぶがあれば。

野呂、辺りをキョロキョロ眺めているが、

野呂　ドアがある。

野呂、ドアを開ける。
舞台明転。

小林　あ。もう、考え無しにあちこち開けないでよ。
井上　小林君、やれば良かったという後悔より、やらなければ良かったという後悔の方が
　ずっと意義があるよ。
小林　今、人生論について議論する気はないよ。
野呂　ねえ、誰か寝てる。
井上　え？
小林　え？
井上　水族館の飼育係？
野呂　いや。女の子だ。

少年探偵団、忍び足で女のベッドを取り囲む。

野呂　ね。
井上　本当だ。
小林　眠ってる。

女、目を覚ます。

女　少年探偵団？
小林　そうです。
女　待ってた。
井上　待ってたの？
女　手伝って欲しいことがあるの。
野呂　なに。
女　レインボー水族館に行きたいの。

小林　あ、ちょうど僕らもそこを探してる。
井上　でもレインボー水族館なら、僕らがいなくても行けるよ。
女　鯨を逃がしたいの。
野呂　え？
女　鯨を、逃がしたいの。出来ればマンタも。あと、イルカも。欲を言えば、水族館の魚全部を。
井上　欲を言い過ぎだよ。
野呂　大体どうやって逃がすの？
女　えい、って。
小林　いや、方法。
女　そこは探偵が考えて。
井上　ええー。でもそれ、探偵って言うか、怪盗の仕事じゃないかな。
小林　そもそも違法だから。
女　でも、鯨もマンタもイルカも、他の魚も、捕まって無理矢理水族館に連れてこられてる。それを助けるのは、探偵の仕事じゃない？
野呂　確かに。
井上　誘拐と監禁だね。
小林　いやいやいや。魚だからね？
女　鯨もイルカも魚じゃない！仮に魚だったとしても・・・魚も人間だよ。
小林　魚は魚だよ。
野呂　違うよ、小林君。生きとし生けるもの、全ては兄弟だってことだよ。
井上　鯨やイルカや魚にも自由に生きる権利があるはずだってことだよ。
女　そうだよ。
小林　え。いつの間にか、井上君と野呂君がそっち側に。
女　そっち側もプリンも無い。
小林　まあ、プリンは無いけど。
女　先ずは、レインボー水族館の見取り図を手に入れてきて。しっかり計画を練るの。今度は失敗しない。
小林　今度？
女　分かった？見取り図だよ。
井上　わかった。
野呂　任せて。

井上と野呂、走って去る。

小林　え。ちょっと・・・明智先生は？

小林、二人を追って退場。
女、一人になると、電池が切れたように眠る。

○十、女の病室
医者が登場する。
手には採血用の器具。
無言のまま女の側に座り、採血の準備をする。
医者、眠っている女に話しかける。

医者　やあ。調子はどう？退屈してない？何か夢を見てる？僕は最近、全然夢を見ないよ。いや、見ないはずはない。見ても憶えていないだけだ。ごくたまに憶えているのは、ろくでもない夢ばかりだ。得体の知れないものに追いかけられるとか、高いところから落ちるとか、街中が君のその茨の棘にくるまれて、眠り姫のお城みたいになってしまって、僕が主治医の怠慢だとあちこちから責められるとか、トップモデルのスカートから覗くハイヒールを履いた脚がムキムキで脛毛とか、ラーメンのトッピングが羊羹とか、そんな夢だ。眠りに就く前にはまた厭な夢を見るかもしれないと心拍数がおかしくなるほど緊張するのだけれども、目を覚ますと布団の中で、また今日も長い一日が始まるのかとうんざりする。だから本当は、僕も君のように、昨日と今日と明日と去年と来年の区別さえ曖昧な夢の中の住人になりたいのかもしれない。勿論君の見ているのが、悪夢でないのだとしたらだけど。

医者、採血の準備を終える。

医者　少し・・・いや、少しでもないか、血を貰うよ。今月は二人、新しい患者さんが増えた。珍しいね。今までずっと、最高でも月に一人だったのに。君の枝も葉っぱもそんなに成長してもいないのにね。痛むかな。君は夢の中で痛みを感じるんだろうか。

医者、女の腕に針を刺し、採血を始める。

医者　血が流れていく。君は生きて、血が流れ、普通に成長してゆく。なのに君はもう滅多に目を覚まさない。こうして君の血を抜いているときだけ、僕は君が生きているって、起きて喋っているときよりも、より強く感じる。痛くはない？

女が目を覚ます。

女　あれ。先生。

医者、驚愕する。

医者　え。
女　どうしたの。あ。痛―。いたたた。いたいー。あー。血、採ってるの？
医者　あ、うん、あの。君、どうして。
女　え。どうしてって。
医者　だって、先月起きたばかりだから。驚いた。
女　ああ。なんか、目が覚めちゃって。
医者　ああ、うん。えーと。調子は・・・と言っても、分からないか、自分では。
女　うん。痛―。ね、これあとどのくらい？
医者　十分くらい。
女　十分か・・・今じゃないと駄目？
医者　もう始めちゃったから。
女　うん。あー。せっかく目が覚めたのに。
医者　ああ、その、申し訳ないけど。
女　あー。あー。なんか・・・先生、気の紛れることない？なぞなぞでも良いから。
医者　なぞなぞ？持ちなぞなぞなんて無い。
女　ええ？お医者さんなのに？！
医者　うん。医者であってなぞなぞ博士じゃないから。
女　えー。じゃ、何か・・・駄洒落とかで良いから。
医者　一瞬の駄洒落じゃ、気は紛れないでしょ。
女　駄洒落を五分間言い続けるか、五分ネタをやるか。
医者　そういうのは、苦手。
女　えー。もー。じゃ、二つだと粉々になる花はなーんだ。
医者　え？
女　なぞなぞ。
医者　え。僕が考えるの？僕が考えても気が紛れないでしょう。
女　じゃ、考えつつ、最近の世界の動向を教えて。
医者　大きく出たね。
女　二つだと粉々になる花！
医者　えーと、花？なんか、あ、そこが引っ掛け的な？たとえば・・・象の鼻とか？
女　そこは引っ掛けじゃない。咲くお花の方。何で象の鼻二つで粉々？
医者　色々なものを、粉砕？

女　先生、象の鼻を高く評価しすぎ。
医者　ああ。
女　ねーねー。私が寝てる間に、瞬間移動装置とか開発されたりしてない？
医者　されてない。
女　タイムマシンも？
医者　それもまだ。
女　スモールライトも？
医者　まだ。
女　冬虫夏草症の治療薬は？
医者　それも、まだ。
女　花。
医者　ええーと。お茶？
女　お茶？なんで。
医者　二つで、にちゃにちゃ、だから？
女　それ花じゃないし、仮にそれが答えなら問題は「二つ合わせるとねばねばする飲み物」だよ。
医者　あ。粉。粉々で、粉。
女　粉は花じゃない。お医者さんなのに！
医者　うん。医者だから。
女　ねえ。お父さんかお母さんって、来た？
医者　ああ、うん。先週見えた。連絡しようか？
女　良い。来るまで起きてられないだろうし。
医者　心配してたよ、君のこと。

女、笑う。

女　先生、優しいね。
医者　いや。
女　先生、今、診察中？
医者　いや。
女　花は？
医者　うーん。あ！椿！！椿だな。分かった。
女　えー？

女、うとうとしている。

医者　ツー、バキ、で、椿だ。ね。

女、寝ている。

医者　薔子。ねえ、答え。

女、深く眠ってしまった。

医者、女の顔をじっと覗き込む。

医者　もう、痛くはない？花の夢を、見なよ。粉々にならない、花の夢を。

医者、しばらく女の顔を見ている。

医者、採血を終え、退場する。

○十一、病院前の公園

母が下手から、男が上手から登場する。

母、途中で人形の鞄を落とす。男、それに気が付き、拾う。

男　あの。

母、気付かず椅子に座る。

男　あの、済みません。鞄。

母　え？

男　鞄。

と、男、鞄を掲げて見せる。

母　あ。ああ。

母、人形に、

母　え？しょこたん、鞄は？持ってないの？落としたの？あれ、あなたの？

男、驚いてそれを見ている。

母　うちのみたいです。ありがとうございます。済みません。
男　あ、いや。

男、母に鞄を渡す。
母、受け取り、人形に、

母　ほら、しょこたん、ありがとうは？

母、人形に礼をさせる。
男、明らかに引いている。

男　あ、じゃ。

男、行こうとするが、母、男に、

母　病院の帰り？
男　え。
母　そこの病院からの帰り？違う？
男　えーと。そうですけど。え。どうして？
母　そっち、病院しかないでしょう。ほとんど病院に行く人なの。あなたは病気には見えないから、お見舞い？
男　ああ、はあ。
母　自分が病気じゃなくて、お見舞いに行く分には、病院て素敵よね、割と。何処もかしこも清潔だし、静かだし。飾りも無くてさっぱりしてる。
男　どなたかのお見舞いに？
母　ううん。ただの仕事帰り。この近くで働いてるの。見てただけ。病院を。
男　見て？
母　そう。帰りに毎日こうして病院を見るの。
男　あの、

男、去りたいがきっかけがつかめない。
母、話し続ける。

母　ここから見えない方の病室は海沿いでしょう。窓からは海が見える。ここから見る夕日って、すごく綺麗なんだよ。太陽がゆっくり、海に沈んでいく。海がオレンジ色に染

まってね、病院の真っ白な壁も、夕方のわずかな時間オレンジとピンクの中間みたいな色になって、外国のお城みたいに見える。それはね、私、祝福だって、祝福って言うのも変かしら。神様の？神様の祝福？そういうあれだと思っていたんだけどね。あ、別に何か特定の神様を信じてたりとかそういうんじゃないんだけど。

男　あ、はい。

母　もし海側に入院してるとして、自分の病状が絶望的な状況だとして、ねえ、それでも毎日綺麗な夕日を見ることって、祝福なのかしら。それって呪いなんじゃないかしら。ねえ。あなた、どう思う。

男　え。えー。あ。うーん。えー。いや、あの、でも、もし自分が重病とかでも、窓の外で戦争してたりとか、テロ起こってたりとか、そういうより、景色綺麗で平和っぽい方が良いんじゃないかと・・・あー、いや、でも、世間や道行く人を呪ったりするかもしれないですね？

母、少しだけ笑う。

母　真面目に答えてくれるのね。

男　ええ？え？今の真面目な問いじゃないんですか？

母　真面目な問いだけど。夫は、聞き流すだけだから。

男　ああ、はあ。あの。どなたか入院してるんですか。

母　うん。ずっと前に。前っていうか、昔。そうね、昔。

男　ああ。

男、人形に目を止めて、

男　珍しいですね、振袖。

母　え？

男　人形。

母　ああ。人形じゃないけどね。素敵でしょう。

男　え？人形じゃないんですか。

母　成人式だから。

男　ああ。はあ。あの、じゃ、僕、

男、去ろうとする。

母　早くよくなると良いね。

男　え。

母　入院してる、あなたのお友達。
男　ああ、はい。
母　公園側か海側かは知らないけど、あなたのお友達が窓から見る景色に祝福されている
　ことを・・・祈っても仕方ないか。
男　いや。
母　祝福であれば良いのになーって、今思って、それで忘れるけど、早く退院できるとい
　いね。
男　あの、はい。

　母、人形の手を振る。
　男も小さく手を振り、去る。

○十二、女の夢
　女が辺りを伺うようにして登場する。
　小林、井上、野呂がその後に続く。

小林　ねえ、やっぱりやめようよ。
女　いやなら帰れば。
井上　そうだよ。お前、怖くなったんだろ。
小林　怖いっていうか。だって、無理だよ、鯨逃がすとか。逃がす方法無いもん。
女　鯨は無理でも、イルカなら。イルカのいるところ、海と繋がってたから。
野呂　そうだよ。コントロール室とか、何かそういう、制御室みたいな場所に忍び込んで、
　海へ続く壁みたいなのをあげちゃえば良いんだよ。
小林　コントロール室も壁も今考えただけであるか分からないじゃん。
女　あるよ。ないと、水の入れ替えとか掃除とか出来ないもん。
小林　見つかったら怒られるよ。今ならこっそり引き返せるよ。
女　じゃ、一人で帰れば。

　急に四人に照明が当てられる。

声　誰だ。

　少年探偵団の三人、「わー」「ぎゃー」など適当に悲鳴をあげて退場する。
　女は静止したまま。
　父と母が登場する。

父、女を反対向きにし、真っ直ぐ立たせ、頭を押さえて下げさせる。

父　申し訳ありませんでした。

母　本当に・・・なんとお詫びして良いのか。

父　ほら、お前も。言うんだ。謝れ。

女、頭を押さえられたまま、

女　だって可哀想だったんだもん。

父、女の言葉を遮り、

父　謝れ。済みませんでした。お前も謝れ。

母　ね、薔子ちゃん。済みませんでした、って。済みませんでした、って。ね。

女、しぶしぶと棒読みのように、

女　済みませんでした。

スポットライト消え、照明は普通に戻る。

父、女を叩く。

慌てる母と、父を睨む女。

父　恥掻かせやがってこの馬鹿ガキ。

母　お父さん、やめて。薔子ちゃんも謝ったんだから。

父、女の視線に気が付き、

父　何だ、その目は。

父、再び女を叩こうとするが、母が止める。

母　やめてください。薔子ちゃんも謝ってるんだから。ね。

父　それが悪いと思ってる顔か。他所の子まで巻き込みやがって。どれだけ頭下げて回ったと思ってるんだ。何で水族館なんかに忍び込むんだ。泥棒かお前は。子供の癖に。

女　泥棒じゃない。

父　黙って他所に忍び込むのは泥棒だ馬鹿。
女　馬鹿じゃない。お父さんの馬鹿。

父、女を叩く。
母、悲鳴をあげる。
父、女を引っ張り、

父　一日くらい牢屋にでも入れられればよかったんだ。代わりに押入れにでも入ってろ。
母　やめてください。やめて。
父　煩い。

父、母を殴るろうとするが、母、素早くよける。
父、何度か殴ろうとするが、母は避け続け、諦める。

女　お父さんが牢屋に入れられれば良いのに。
母　薔子ちゃん。

女を残して舞台暗くなる。
女、膝を抱えてうずくまり、頬を押さえる。
少年探偵団がそっと登場する。

小林　薔子ちゃん。
井上　痛かった？
野呂　大丈夫？
女　大丈夫。押入れは嫌いじゃない。誰にも邪魔されずに色んなことを考えられる。閉じ込められたイルカや鯨やマンタやエイやマグロなんかはこんな気持ちだろうか。
小林　薔子ちゃん。水族館の鯨や魚は、あそこでああして泳いでいるのが仕事なんだよ。ああして、誰かに見てもらって、綺麗だねって言われて、それで、えさをもらったり、病気にならないように管理されて、敵に食べられたりすることもないんだ。大人が会社に行くのや、僕らが学校に行くのと一緒だよ。
女　曲芸したくないイルカはどうなるの？
井上　でも、アシカ、芸の途中で逃げるやついたよね。
野呂　あれには驚いたね。
井上　ボールも落としまくりだったね。
野呂　きっと隣で上手にやってたアシカからあとでいじめられるに違いないよ。
井上　ボール落としたアシカ、魚盗み食いしてたもんね。

野呂　よっぽど人材不足なんだ。

井上、女に、

井上　話し合いの結果、人材不足の場合は無理に働かされるけど、やる気のない奴はやる気のないままだらだら芸をするんじゃないかという推論に達したよ。

女　今隣で聞いてたから、思考過程の全てが分かったよ。

小林　だから、逃がすとか、やっぱり間違ってると思うんだ。

女　間違ってる？あんなに狭い所で不自由なのに？

小林、返事をせず、少年探偵団、ゆっくり退場する。

女、頬を押さえたまま、

女　動けないのは厭だ。不自由は厭だ。

舞台徐々に暗くなる。

○十三、宇宙飛行士

暗くなりきる前に宇宙飛行士が登場し、舞台明るくなる。

宇宙服には長いチューブが続いており、宇宙飛行士はそれを引きずって動く。

ヘルメットのため顔は見えないが、声は女性だ。

宇宙飛行士　こんにちは。

女　こんにちは。

宇宙飛行士　ここは？

女　私の病室。

宇宙飛行士　ああ、そうなんだ。

女　あなたは？

宇宙飛行士　宇宙飛行士です。

女　ふーん。動き難くない？脱げば？

宇宙飛行士　そういうわけにはいかないので。

女　そうなの。

宇宙飛行士　うん。へー。ここ、良い眺め。

女　ああ。そう？

宇宙飛行士　うん。

宇宙飛行士、窓の外の船に気が付く。

宇宙飛行士　あ、船？
女　ああ、うん。
宇宙飛行士　え。船だよ。

宇宙飛行士、手を振る。

女　見えないよ。向こうから。
宇宙飛行士　そうかな。
女　船に乗ってる人は、病院の窓に注目したりしないよ。
宇宙飛行士　でも、気持ちだけ。
女　何の？
宇宙飛行士　船見れてうれしいなーっていう。
女　ああ。
宇宙飛行士　あ。飛行機？

宇宙飛行士、手を振る。

宇宙飛行士　向こうから見えなくても良いんだよ。でもいつか私が、もし船や飛行機や、とにかく何か乗り物に乗ったら、道行く人に手を振るよ。
女　うん。あ、えーと。じゃ、私も、手を振るよ。船や飛行機に乗ったり見たりしたら。出来るだけ。そうしたら、いつかどこかで、お互い手を振り合うことになるかも。
宇宙飛行士　うん。うん。あ、あれだったら、今ここでそうしても良いけど。
女　いや。今はいいや。
宇宙飛行士　あ、そう？
女　うん。
宇宙飛行士　じゃ、乗り物に乗ったときか、見たときに。
女　うん。
宇宙飛行士　あのね、あなたのこと、仲間かなって思ったんだ。
女　え？
宇宙飛行士　それ。

宇宙飛行士、女のチューブを指し示す。

宇宙飛行士　繋がってるから。
女　ああ。

宇宙飛行士、自分のチューブを引っ張って見せる。

宇宙飛行士　私と同じかなって。宇宙飛行仲間かなって思ったんだけど。
女　ああ。
宇宙飛行士　もしかして違う？
女　うん。ごめん。ちょっと宇宙飛行的なことは、してない。
宇宙飛行士　あー。そうなんだ。
女　うん。これはただの・・・チャームポイント？
宇宙飛行士　そっか。宇宙情報交換したかったんだけど。
女　宇宙情報は無いわ、手持ちに。
宇宙飛行士　そうか。
女　ないけど、たまに話に来てよ。宇宙の話とか。
宇宙飛行士　うん。
女　宇宙で何してるの。
宇宙飛行士　地球を目指してる。
女　地球？
宇宙飛行士　うん。じゃ、私、もうちょっと探索してくる。またね。
女　うん。またね。

宇宙飛行士、去る。

○十四、病院前の公園

母が登場し、椅子に座る。
女子高生が登場する。何となくふらふらしているが、途中、口を押さえてうずくまる。女子高生、吐きそう。
母、急いで駆け寄り、女子高生を支える。

母　薔子ちゃん？薔子ちゃん？！薔子ちゃん、大丈夫？

母、女子高生を椅子に座らせる。
女子高生、しばらく母の腕の中でぐったりしているが、

母　薔子ちゃん、薔子ちゃん、しっかりして。目を開けて。
女子高生　え？
母　良かった。大丈夫？
女子高生　はい。あの、ありがとうございます。
母　薔子ちゃん、どうしたの？具合悪いの？
女子高生　え。えーと。違います。
母　え？
女子高生　あの。ショウ子さんじゃないです。
母　あ、そう？ああ。そう。そうか。

母、呆然としている。

女子高生　あの、腕。
母　え？あ。ああ。ごめんなさい。

母、女子高生の腕を放す。母、女子高生の顔を繁々見て、

母　酷い顔色。お茶、飲んで。

母、鞄から水筒を取り出し、女子高生に渡す。
女子高生、素直に受け取り、お茶を飲む。

女子高生　あの。私、似てるんですか、ショウ子さんに？
母　え？ああ、うん・・・分からない。
女子高生　え？
母　何となく、似てるなって思ったの。
女子高生　なんとなく？
母　あなた、幾つ？中学生？高校生？
女子高生　高二です。
母　そう。そうなの。学校は休み？
女子高生　病院だから。
母　ああ、そうね。そうよね。病院って、そこ？ホウヨウ会病院？
女子高生　はい。
母　私、あのホテルで働いてるの。パート。二十三階のレストラン「フォンド・マリーノ」。
フレンチレストラン。でもフォンド・マリーノはイタリア語。イタリア語で「海底」っ

て意味。
女子高生　二十三階にあるのに？
母　二十四階が水族館で、その下にあるから、だって。突っ込み所の多い店。でも料理は
まあまあ。
女子高生　美味しい、ではなく？
母　そこまでではない。
女子高生　ああ、なんていうか。
母　微妙よ。
女子高生　ええ。
母　でも、病院が見える。
女子高生　え？
母　ほら。ホウヨウ会病院。厨房の窓からも、あの病院が見えるの。あそこに、娘が入院
してたの。
女子高生　ああ。
母　最初は通っていたけど、結局入院になっちゃって。冬だったかな。豆まきは終わって、
バレンタインはまだ。そういう時期。小学校の卒業前だったから、すごくがっかりして
たの。中学の入学式にも出られなかったしね。
女子高生　ああ・・・。
母　制服は作ったのよ。病室で一度袖を通した。夏服も。写真を撮った。夏服のときは、
薔子、泣いてた。

母、女子高生の顔を見て、

母　そんな顔しないで。大丈夫よ。今は、いつも一緒にいるから。
女子高生　あ、そう、なんですか。
母　うん。

母、人形を手に取る。

母　ほら。しょこたん。「こんにちは」。
女子高生　あ。

母、人形の顔と女子高生の顔を見比べる。

母　似てるかな。そうね。少しだけ似てる。雰囲気とか。
女子高生　ああ、はい。

母　しょこたんはね、少し、何ていうか、夢見がちな子でね。大きくなるに連れ、小学校中学年くらいかな、三、四年生くらいから、正直、私、時々薔子ちゃんが何考えてるのか分からなくて、怖かった。一緒に住んでいるのに、どんどん離れていくみたいだと思ってた。

女子高生　そう・・・。そう、ですね。私も親とは、別にそんなに仲良くないかも。

母　そういうものか。

女子高生　それでも、時々怖くても、ショウ子さんのこと、好きだった？

母　え？

女子高生　産まなきゃ良かったのにとか、そう思うことはなかった？

母　大丈夫よ。あなたのお母さん、あなたのこと、好きだよ・・・多分。

女子高生　あ、いや、そういうあれじゃなくて・・・

母　そうね、ごめんなさい。適当な慰め言っちゃった。あなたのお母さんのこと知らないのにね。

女子高生　いや、あの、出産の時、怖くなかった？だって、すごく痛いんでしょう？

母　痛いけど、耐えられないほどじゃないよ。

女子高生　赤ちゃんって、可愛いものなの？今でも、ずっと、可愛い？

母　赤ちゃんは、可愛いよ。私は、産まなきゃ良かったとは、一応一度も思わなかった。可愛いけれど、煩わしかった。それから、恐ろしかった。最初は自分と区別の付かない、自分の一部みたいだった子供が、段段私と違うものに、全然違う、全然理解出来ない物になっていくのが、恐ろしかった。今は、こうしていつも一緒だけど、どうしてかしら、窓から病院を見てるとね、時々物凄く、泣きたくなる。

女子高生　そう、ですか。

母　薔子が小さいときは、この子が死んだら私も死ぬって思ってたんだけど。今は、どうかしら。死なないね。多分。多分、ね。

暗転。

○十五、男の夢

明転すると、男の夢。

男が弟（を演じる井上）と話している。

井上　俺、働こうかな。

男　いや、受験生。

井上　薬代、払っていけないじゃん。

男　それは・・・大丈夫だよ。

井上　大丈夫じゃないし。
男　俺が働くから。
井上　今も働いてるじゃん。それで生活費ギリギリじゃん。
男　いや、あの、正社員になれば、給料上がるから。
井上　空想科学的な仮定はやめて。
男　人の経済活動をＳＦみたいに言うな。
井上　派遣じゃん。
男　派遣ですけど？
井上　ごめん。
男　別に良いよ。
井上　だって。知ってるけど。兄ちゃんが一生懸命働いてるのは、俺だって知ってるけど、
　でも三ヶ月ごとに、違う工場行かされたりとか、勤務形態変わったりとかじゃん。
男　大丈夫だよ、本当にさ。正社員の話も来てるんだよ。ちょっと、転勤ていうか、遠方
　勤務になるけど。それで迷ってたけど。だから、

小林、野呂が登場する。

小林　井上君。
井上　え。
男　え。
野呂　遊んでないで戻って。
男　え？
井上　ああ、ごめん。

井上、小林と野呂の方に寄る。

男　ちょっと。え？ユウト？

女が登場する。

女　よく見て、それ、ユウトさんて人じゃないから。
男　え？あ。本当だ。ユウトじゃない。え？いつの間にか薔子さんまで？あれ。入院は？
　ユウトに全然似てないのに、ユウトみたいなこと言ってたその人は？
井上　井上です。
男　なぜ弟の振りを？どうして薔子さんがここに？あと、君たち誰？ここ、何処？
小林　質問はひとつに絞ってください。

野呂　大人なのに。
井上　夢の中です。
男　誰の？
女　小野君の。
男　え？僕の？夢？これが？
女　うん。遊びに来た。小野君が私の夢を見ていれば、私は途中の、なんか、集合的無意識？みたいなそういう、海を潜って、遊びに来れる。
男　ああ、そう。そっか。
女　だから、本当はチューブあるけど、ないみたいな感じにしてる。

女、袖をまくると、腕に十センチくらいのチューブがくっついている。

女　これだけ、現実の名残。
男　ああ。

女、少年探偵団を指し示し、

女　少年探偵団。
小林　小林です。
井上　井上です。
野呂　野呂です。
男　ああ、はい。小野です。
小林　夢の中なので、どんな人物も大体は僕らが演じます。
男　え？なぜ？
女　弟、受験生なの？
男　うん。高３。

少年探偵団、急に寸劇を始める。

小林　おい、お前、文学部って・・・それで大丈夫なのか？将来の、就職のこととか考えてないだろう。それとも文学に一生を捧げるつもりか？
井上　え、いや・・・。
小林　今、就職難なんだよ？分かってる？進学して、ハイ、終わり、ってわけには行かないんだよ。
井上　えと、それは、まあ。
男　え？ちょっとこれ、何？俺のトラウマ、勝手に寸劇にしないで。

小林　好きなこととか、得意なこととか、なりたいものとかないのか？！
井上　いや、特に・・・。
小林　ホントあれだな、お前、つまんねーやつ！
男　うわあああああ。やめてー。思い出したくない！！

野呂は井上のすぐ後ろに立ち、心の声役。

野呂　でも本当に、なりたいものも好きなものもないんだ。漫画とゲームはまあ好きだけど、のめりこむほどじゃない。自分で絵を描こうとは思わないし、プログラミングも出来ない、同人誌も買わない。オタクになるほどの情熱はない。
男　ちょ、心の声やめろ！！
野呂　それにつけてもモナカアイス大好き。
男　確かに！でもそれわざわざこんな局面で思わなかったよ、確か。

小林、突然倒れる。

井上　ああっ。高さ二百二十二メートルを誇る、イッスイツリー展望デッキのガラスを突き破り、小林君が狙撃されただと？！
男　あ、これ昨日見たテレビの・・・
野呂　ありえない距離からの狙撃！！まさか！

女も寸劇に参加する。
女、車を運転するパントマイム。

女　乗れ！！追うぞ！！
男　あ、薔子ちゃんも？

小林、後部座席に、井上、野呂、助手席に乗る。

男　あれ、生き返った？！
井上　クソ・・・助手席がぎゅうぎゅうだ！
女　飛ばすぜ！！

が、すぐに目的地に着く。
少年探偵団三人、急いで車から降りる。

野呂　狙撃ポイントには、空の薬莢とモナカアイス！！

少年探偵団、急に決め台詞。

小林　ラッパひとつで新宿歩く！見た目は子供、頭脳も子供！ただの子供！！

井上　見た目は大人、頭脳は子供！可哀想な子！

野呂　見た目は子供、頭脳は大人！童顔！

三人、ポーズを決めると、去る。

男　あ。すごく唐突にいなくなった。

女、何事もなかったように、

女　弟、勉強してる？

男　多分。

女　働こうかなって言ってたよね。

男　うん。

女　本当は井上君だけど、あれ。

男　うん。どうして見ず知らずの人がそう言ったのかは置いといて、弟に同じこと言われた。現実で。

女　働くの？

男　ユウトは、あ、ユウトって弟ね、

女　うん。

男　ユウトは頭良いんだ。成績も良い。理数系なんだ。工学部に行きたいって言ってた。よく分からないけど、機械工学っていうの？なんか、ロボットの設計をする人になりたいって。

女　カッコイイね。

男　うん。

女　ワープ装置とかタケコプターとか作るんだね。

男　ああ、うん。それはちょっと、あれだけど。定かではないけど。うん。だから、ユウトには、ちゃんと進学してほしいんだ。

女　そっか。

男　うん。本当は、俺が病気になった方が良かった。

女　そんなことないよ。小野君は優しいお兄さんだね。

男　俺だったら、死んでも良かった。ユウトには、未来があるのに。

女　小野君にだって未来はあるでしょう。
男　ないよ。
女　あるよ。
男　あっても、ろくな未来じゃないよ。
女　そんなこと言わないで。
男　ごめん。あの。夢の中だけど、折角だから、何かしない？
女　何かって・・・なぞなぞ？
男　いや・・・えーと、病院では出来ない何かを。
女　あー、じゃ、暴飲暴食？
男　それもあれだけど、できればそれは、薔子さん個人の夢の中でやって。
女　じゃ、踊る？
男　ええ？！

少年探偵団三人が楽器を持って登場し、舞踏会風の音楽が始まる。

男　ちょ。いや、こういう踊りは。漠然としたイメージしかないから。
女　大丈夫。夢の中だから、漠然としたイメージだけで踊れるよ。

女、男の手を取り、漠然とした感じで踊りだす。形になっているようななっていないような、正しいようなそうでもないような、踊り。
少年探偵団の演奏も、漠然としており、音楽とずれている。

男　本当だ。茫漠としている。演奏も、なんか、漠然としている。
女　小野君。愛の中に、
男　え？！
女　愛の中に時差があるもの、なーんだ。
男　あ。なぞなぞ？
女　うん。
男　なぞなぞは結局やるのか。
女　なぞなぞなら踊りながらも出来るでしょう。愛の中に時差があるもの。
男　随分詩的な。
女　うん。これ、素敵でしょう。問題。愛の中に、時差。
男　それ、普通に男女とかいう答えじゃ駄目なんだよね。
女　全然駄目。なぞなぞになってない。
男　愛の中に時差？何それ。えー。

男、なぞなぞに集中して、踊りが形をなさなくなる。

女　小野君。踊り踊り。

男　あ、ごめん。

男、体勢を立て直す。

男　エアメール？じゃなければ、国際電話？

女　それ、時差しかないよ。

男　恋人からのエアメール。もしくは、恋人からの国際電話。

女　いや、なんか、全然違いすぎて突っ込めない。

男　うーんとねー。

男、考えに集中すると、踊りがぐだぐだになる。女に注意され直る。

男　告白されて付き合い始めて、自分はあまり好きじゃないと思って、わりと冷たくして
て、そのことに傷付いた相手がすっかり自分から離れていって、しばらくしたあと、そ
の相手を自分が随分好きになってしまったことに、気付いた状態！

女　長い！！あと、謎がない。

男　謎はあるよ。人の心の不思議だよ。

女　そういう謎はなぞなぞでは求められないよ。パンはパンでも食べられないパンは？て
いう質問に、腐ったパンって答えてる感じだからね、それ。答えはフライパンだからね？

男　フライパンは分かるよ。でも愛とフライパンは随分違うよ。

女　仕組みは同じだよ。

男　降参。分からない。答え教えて。

女　次、病院に来たときに教えるよ。それまで考えてて。

男　え？長いよ。あと、夢でしょう、これ。

女　夢だよ。

言いながら、女と野呂が入れ替わる。小林が男と踊り、女が野呂の楽器を弾く。
井上は小林の、野呂は井上の楽器を演奏する。

小林　夢だよ。

小林が女と入れ替わり、井上が男と踊る。女は井上の、小林は野呂の楽器を弾く。

井上　夢だよ。

井上が小林と入れ替わる。野呂は男と踊る。女は小林の、井上は野呂の楽器を弾く。

野呂　夢だよ。
男　薔子ちゃん。
野呂　はい。
小林　はい。
井上　はい。
女　はい。
男　答え、教えてよ。
野呂　次に会ったときに、
井上　教えるよ。
小林　だから、
女　会いに来てね。

男を残して唐突に舞台暗くなる。

○十六、女の病室

再度明るくなると、女の病室。
男が女に声を掛ける。

男　薔子ちゃん。

女、すぐに目を覚ます。

女　小野君。紫陽花だよ。
男　え？

男、キョロキョロして、辺りを見回す。
窓の外を見て、

男　あ。本当だ。咲いてる。

女も同じ方を見て、

女　本当だ。早いね。
男　え？
女　今、昼だよね？お休みの日？
男　うん。土曜。弟の通院についてきた。
女　ユウト君？
男　うん。え？言ったっけ、弟の名前？
女　うん。
男　えー。あー。そう、だったかな。
女　診察は？
男　今、点滴してる。一時間くらい掛かるんだ。
女　点滴？薬貰って終わりじゃないの？
男　うん。なんか・・・ちょっと、どうしてだか、病気が進行してるみたい。あ、でも、ユウトだけじゃなくて、冬虫夏草症の人、皆ね。今まで、殆ど病状に変化がなかったのに、ここ一ヶ月くらいで、ちょっとづつ悪化してるんだって。
女　へえ・・・。
男　薔子ちゃんは大丈夫？
女　私は、もう関係ないよ、そういうの。
男　あ、うん。ごめん。
女　ユウト君は、勉強してる？受験勉強。
男　え？
女　もう、就職しようとか、言ってない？
男　うん、今のところは・・・って、え？なぜ、それを？
女　この間、言ってたでしょう。
男　え。いつ？
女　工学部に行きたいんでしょう？それでワープ装置とかタケコプターとか、空飛ぶスケボーとか作るんだよね？
男　いや、それは作らないと思うけど。あれ？この話。
女　したよ一回。夢の中で。
男　え。だって、それ、俺の夢のはず。
女　うん。小野君の夢だよ。遊びに行った。
男　えー。
女　ろくな未来じゃないから、小野君、病気になったのが自分なら良かったって、言ってた。
男　夢だよ。
女　夢だよ。死んでも良いと思うのは、夢の中だけ？

男　うん、いや、あの、うん。

男、戸惑っているが、

男　俺ね、面倒くさがりなんだ。
女　そうなの？
男　うん。人見知りって、一応そういうことになってるけど、本当は違う。人と係わるのが、煩わしい。誰かの心の中を推し量って思い遣って気を使うのが、面倒だ。時々、嵐のように、全てが面倒になるんだ。面倒で面倒で、生きていることが面倒で、死んでしまいたくなる。
女　そうなの？
男　でも、そういうことは言っちゃいけないもんね。
女　うん。だね。
男　薔子ちゃんと、代わってあげられれば良かったんだけど、本当に。
女　今は？今も面倒？
男　なるべく考えないようにしてる。面倒の嵐に巻き込まれないように、身を伏せてる。
女　伏せてるの？
男　うん。伏せてるよ。頭の上を、嵐が通り過ぎていくのを待ってる。過ぎてしまえば、次の嵐まで普通に暮らしていけるから。ユウトのこともあるし、働かないとね。
女　そうか。
男　うん。なんか、あれだね、口に出すと、馬鹿みたいだね。
女　ううん。ねえ、今も面倒？生きるのが。
男　いや。あの。薔子ちゃんといると、嵐が少し、収まるよ。
女　え、そう？
男　うん。あの、なんていうか、

ドアが急に開く。
医者が登場する。
男も女も、医者も驚く。

医者　え。小野さん。何を・・・何をしてるんですか。
男　あ、その、ちょっと、あの、迷ってしまって。
医者　迷って？！
男　人生に。
医者　出て下さい。
女　えー。

医者　面会時間外。そもそも君は面会謝絶。感染ると困る。
男　いや、あの、弟のこともあるし、感染のことは大丈夫ですから。
医者　大丈夫じゃないから言っている。素人が勝手に判断しないで下さい。出て。
女　厭。
医者　薔子。

男、医者が女を名前で呼んでいることに驚くが、何も言わない。

女　厭だ。折角小野君来てくれたのに。ねえ、ちょっとで良いんだよ。また眠るまでの、ほんのちょっとの間。一人じゃつまらない。
医者　だったら、ラジオかテレビを持ってくる。とにかくこの部屋は立ち入り禁止。
女　ラジオもテレビも嫌い。小野君と話したいの。ねえ、先生。
医者　小野さん、出て下さい。
男　いや、でも。
医者　出て下さい。
女　先生。
男　あの。

男、途方に暮れたように女と医者を見比べている。
舞台、男と医者を残して暗くなる。

男　可哀想じゃありませんか。
医者　あの部屋は、と言うよりこの病棟は、関係者以外立ち入り禁止です。もう二度と、絶対入らないで下さい。
男　どうして。
医者　どうして？うつる病気だからです。
男　でもそれなら弟も。
医者　弟さんとは病気の進行具合が違う。全然違う。そんなことくらい、ひと目で分かりますよね？
男　それは、はい。いや、でも、心配で。
医者　あなたは弟さんの心配だけしてれば良いんだ。なぜ薔子に係わるんです。どうして薔子を起こすんだ。
男　あの、友達だから。
医者　友達？薔子と？馬鹿馬鹿しい。あの子が入院してから起きていた時間は、全部合わせても三年にも満たない。見た目は大人でも、頭の中身は子供だ。
男　見た目は大人、中身は子供・・・・可哀想な、子。

医者　ええ？
男　あ、いや。
医者　とにかく。薔子の感染力は、あなたが思っている以上にずば抜けて高い。弟さんが他の方に病気を移すことはほぼあり得ないと言って良い。でも彼女は違う。状態としては後期だ。さっきのように病室を訪ねることが重なれば、あなたもいずれ冬虫夏草症に罹ってしまう。
男　あの、薬は？
医者　彼女には効きません。
男　どうして。
医者　彼女の血から血清が作られる。それが冬虫夏草症の薬です。
男　え。えー。じゃ、弟の薬って、彼女の？
医者　はい。
男　え。えー。
医者　他に治療法はありません。
男　じゃ、彼女は？
医者　ああして植物化してゆくだけです。
男　そんな。
医者　冬虫夏草症の人間が増えれば増えるほど、彼女からたくさん血を貰うことになる。殆どの場合、眠っているから痛みはないと思いますが、さっきのように運悪く目を覚ますと、苦痛を伴う。もしあなたが彼女の部屋に足繁く通って冬虫夏草症になれば、彼女の苦しみを増やすことになるだけです。言ってること、分かりますか。
男　はい。
医者　では、今後、蔓原さんの病室には決して近付かないで下さい。いいですね？
男　はい。

医者、去る。
しばらくして、男も反対方向へと去る。

○十七、屋上
女子高生が登場し、ぐったりと座る。
時折吐きそうになり、口を押さえる。
看護婦が登場する。

看護婦　あ、またこんな所に。大丈夫？中で休みなさい。
女子高生　良い。ここが好きなの。

看護婦　あのね、あなた、早く決めないと、どうにも出来なくなっちゃうよ。
女子高生　分かってる。
看護婦　そう？
女子高生　分かってるよ。
看護婦　もう少しで順番だからね。
女子高生　うん。
看護婦　ご両親は知ってるの？相手は？

女子高生、黙っている。
看護婦、去りかけるが、女子高生が再度吐きそうになる。
看護婦、女子高生に駆け寄る。

看護婦　やっぱり、中で休みなさい。

女子高生、看護婦に支えられて退場。

○十八、少年探偵団
少年探偵団が登場する。
井上の手には、るるぶ。

小林　井上君、地図。
井上　このるるぶは、るるぶ沖縄だった。
小林　自分の旅行したい場所の地図を持ってこないで。
野呂　なんだか、ぐにゃぐにゃして頼りなかった周りの景色が、随分はっきり見通しよくなった気がする。
小林　そう。そうなんだよ。
井上　薔子ちゃんの側にいれば、僕らも世界も色濃くなってゆく気がする。
野呂　これが、世界の裂け目に近付いてるってこと？
小林　そうかもしれない。
井上　それなら出口はもうすぐだ。

女が登場する。

女　機械室は見つかった？
小林　あの、薔子ちゃん。

女　何。
小林　水族館に押し入るとしてね、
女　押し入るとかやめて。
井上　そうだよ。感じ悪いよ。
野呂　せめて潜入捜査と呼んで。
小林　潜入捜査するとして、中の魚は移動出来ない可能性もあるよね？海沿いにあって、そのまま海に続いてれば、柵っていうか、水槽を壊せばいいけど、室内にある水槽で、大型の機械でしか移動出来ない場合もあるよね？マンタとかもだけど、ちょっと大型だと、マグロとかでも網じゃ無理だよね？
女　そこは・・・少年探偵団が水槽を壊して、
井上　それはさすがに駄目だよ。
野呂　魚が死んじゃうよ。
女　じゃあどうすればいいの？！
小林　諦めようよ。
女　それは、いや。

宇宙飛行士が登場する。

宇宙飛行士　やっほー。
女　あ。やっほー。
小林　こんにちは。あの、こちらは？
宇宙飛行士　宇宙飛行士です。
女　見て分からないの？
小林　それはまあ、もしやとは思ったけど。
井上　宇宙、飛行してるんですか。
宇宙飛行士　うん。
野呂　宇宙服重くないですか。
宇宙飛行士　重くないよ。
井上　ちょっと前のアイソン彗星って、結局何だったんですか。
宇宙飛行士　飛行してるだけだから、宇宙の仕組みについては分からないよ。
野呂　えー。そうなんだ。
宇宙飛行士　何してるの。
女　魚逃がし。
宇宙飛行士　え？
小林　水族館から、鯨やイルカを逃がしたいんです。
宇宙飛行士　ふーん。

井上　でも逃がし方が思いつかないんです。
宇宙飛行士　そうなの？それは致命的だね。
野呂　ちょっと、この辺を無重力にして、魚を水から浮かせてもらえませんか？
宇宙飛行士　無重力空間にいるだけで、無重力状態を作り出せる能力を持ち合わせてたりはしないんだ。
女　何か、発見はあった？飛行して。
宇宙飛行士　うん。世界は思いのほか、明るいね。
女　そう？
宇宙飛行士　うん。思ってたより、ずっと。
女　ふーん？
宇宙飛行士　じゃ、もう少しこの辺飛行してみるね。
女　うん。頑張ってね。

宇宙飛行士、去る。
急に四人に照明が当てられる。

声　誰だ。

父と母が登場する。

父　お前たち、ここで何を

女、父の言葉の途中で、小林のポケットから拳銃を引き抜き、躊躇いなく二人を撃つ。
暗転。

○十九、診察室
明転すると、父と医者が座っている。

父　みたいな感じの夢を、最近しょっちゅう見るんだけどね。前は、たまに、年に何回かだったのに、最近はしょっちゅうで。疲れるんだ。先生、なんか、よく眠れる薬とかない？朝までぐっすり、夢も見ないで寝れる薬。
医者　申し訳ないですけど、それは精神科や心理カウンセラーの仕事ですね。一度、病室に行かれてみては？もう何年もお会いになってないでしょう？
父　だって寝てるだけだろう。

医者　それは、まあ、そうですけど。でも、成長されましたよ。
父　やめとくよ。
医者　そうですか。
父　薔子は、役に立ってるの？
医者　え？
父　役に立ってるんだよな？その、病気の、病気の究明っていうか、研究に、入院して、血を採って、それで、役に立ってるんだよね？
医者　ええ。
父　それで、お金、くれてるんだよね？
医者　ええ。
父　じゃあさ、患者増えたら、冬虫夏草症の、礼金も増える？
医者　え？
父　いや、仮に、患者が倍になれば、倍役立つんでしょ？
医者　ええと、そういうシステムじゃないので。
父　ええー。そうなのか。
医者　ええ。申し訳ありませんけど。
父　税金上がったから、礼金増えても良いかなと思って。
医者　そういうシステムじゃないので。
父　あ、そう。
医者　ええ。
父　あのさ、あいつ、あのまま、ずっと生きるの？何十年も。
医者　それはまだ、分かりません。
父　たまには、目を覚ますんだよな？
医者　ええ。
父　あいつ、何のために生きてるの？
医者　え？
父　あ、いや。あ、うん、じゃ、また来ます。

父、去る。
医者、一人になると、壁を強く叩き、去る。

○二十、女の病室
ベッドごと女が登場し、女の部屋。
女は寝ている。
看護婦が登場し、女の顔を覗き込む。

瞼を指で開いたり、腕を取ったり血圧を測ったりし始める。
それをメモ帳に書き付ける。
医者が入ってくる。
看護婦はそれに気付かない。
医者、看護婦の様子をじっと見ているが、

医者　何をしている。
看護婦　あ。
医者　何をしている。
看護婦　ちょっと、様子を。
医者　様子を見てきてくれなんて頼んでいない。ここは立ち入り禁止だ。
看護婦　済みません。

看護婦、女から離れ、出て行こうとするが、

看護婦　でも先生。最近、冬虫夏草症の患者さんが増えたと思われませんか。

医者、嗤う。

医者　増えた？冬虫夏草症の患者が病院に押し寄せているとでも？
看護婦　二、三ヶ月前まで、冬虫夏草症に新しく罹患される方なんて、月に一人もいらっしゃいませんでしたよね。二ヶ月か三ヶ月かに一人。なのに、先々月は新規の患者さんが一人、先月は二人、今月は昨日三人目が冬虫夏草症と診断されましたよね。
医者　偶然だろう。
看護婦　そうでしょうか。来月は四人になるのでは？
医者　馬鹿馬鹿しい。
看護婦　本当に？先生、本当に馬鹿馬鹿しい疑問ですか。冬虫夏草症の母体が強力になっているのではないのですか。
医者　馬鹿馬鹿しいね。そんなことはない。
看護婦　蔓原さんの入院費は、何処から出ているんです。
医者　何だ、急に。そんなことは君には関係ない。
看護婦　蔓原さんの生命維持にはかなりのお金が掛かっているはずですよね。
医者　君には関係ない。余計なことに首を突っ込んでいると、クビになるよ。
看護婦　そうなんですか？
医者　院長だって取り合わない。仮に、万が一マスコミに君のたわごとを喋っても、記事になることは無く、君は名誉毀損で訴えられる。

看護婦　院長もグルだということですか。
医者　グルなんてチンピラみたいな言い方はやめた方が良い。
看護婦　一味？
医者　なお悪い。
看護婦　親玉？
医者　ふざけてるね？
看護婦　はい。調子に乗りました。クビは厭だし降格も厭だし残業も厭です。
医者　余計なことに口出ししなければ、クビも降格もないよ。残業は皆平等にあるよ。
看護婦　あるのか。
医者　早く業務に戻って。
看護婦　はい。では、失礼します。

看護婦、去る。
医者、女に、

医者　増えた。冬虫夏草症。どうしようか。少し、枝を切ってみようか。

医者、はさみを取り出し、枝を切る。
女、眠ったままだが、低いうめき声を上げ、身をよじる。

医者　ああ。

切った枝とはさみには血にしか見えない、赤い液体がべっとりと付く。

医者　痛い？でも、切るよ。

医者、更に枝を切り、女の低いうめき声が続く中、ゆっくりと舞台暗くなる。
暗くなりきる前に宇宙飛行士が登場する。
医者は去り、舞台は徐々に明るくなる。

〇二十一、宇宙飛行士
女、苦しんで眠る。
宇宙飛行士はそれを揺り起こす。
女、目を覚ます。

女　あ。
宇宙飛行士　やっほー。
女　ああ。
宇宙飛行士　大丈夫？
女　ああ、うん。宇宙飛行中？
宇宙飛行士　うん。でも、

と、宇宙飛行士言いかけるが、窓の外に飛行機を見つけて手を振る。

宇宙飛行士　飛行機が。
女　ああ。本当に好きだね、飛行機。
宇宙飛行士　うん。地球に着いたら、バスとか電車とか飛行機とか乗りたかったな。あと自転車とか。
女　乗り物好きなんだね。
宇宙飛行士　うん。宇宙船に乗ってるのも好きだけど。今もずっと、宇宙と宇宙船が好きだけど。旅して地球に降り立ちたかった。
女　早くおいでよ。待ってる。
宇宙飛行士　ううん。色々考えたんだけど。宇宙船から、離れなきゃ。
女　え？離れるって？
宇宙飛行士　地球には、ちょっとたどり着けない。
女　え。何それ。
宇宙飛行士　宇宙船から離れることにした。
女　どうして。
宇宙飛行士　こうして宇宙船と繋がったまま宇宙をうろうろしてたけど、その間、世界は真っ暗だった。真っ黒い雨が降り注いでいるようだった。だから世界というのは、宇宙というものは、真っ暗な、真っ黒なものだと思っていたんだけど、あちこち見て回って、それから私も少しだけ成長したから、今はそうじゃないって分かる。私に降っているのは絶望とか悲しみとかそういうものだ。宇宙船が、宇宙が、私の宇宙飛行に苦しんでいたんだよ。
女　やめてよ。そういうこと言うの。
宇宙飛行士　地球に行けないのはちょっと残念。でも、また宇宙船には乗り込む。
女　やめてよ。飛行機に乗ったり、飛行機に手を振ったり、そういうのを
宇宙飛行士　そういうのを、またいつか宇宙船に乗って、本当にいつかまた、絶対に、宇宙船に乗り込んで、今度は地球に降り立つ旅をするよ。
女　乗ったままで良いじゃん。
宇宙飛行士　宇宙を救えるのは私だけなんだ。

宇宙飛行士、チューブを引っ張り自分の方に手繰る。

女　名前も聞いてない。

宇宙飛行士　名前は、ないんだ。あ、飛行機とか船とか見たら、手を振ってね。バイバイ。

宇宙飛行士、はさみでチューブを切る。

宇宙飛行士、吹き飛ばされるようにして退場する。

はさみだけが残る。

舞台薄暗くなり、舞台の隅に男が登場する。

男、預金通帳をしばらくじっと眺めている。

それを仕舞うと、舞台明転。

○二十二、女の病室

男が女のベッドに近付くと、女の病室。

床のはさみはなくなっている。

男　あの。僕、タイに行くことになったんだ。あ、タイって言っても魚じゃなくて。

女　それくらい分かるよ。外国でしょ。え。行くの？良いな。どのくらい？

男　三年とか、五年とか。

女　え？

男　転勤なんだ。仕事。タイに工場あってね、そこに。

女　あー。えー。ふーん。え。小野君、何の仕事の人？

男　電気製品の部品作ってる。携帯電話とか。

女　ふーん。

男　あの。手紙、書くよ。

女　うん。

男　タイのお菓子も送る。笛木先生に頼んで、届けてもらう。

女　うん。

男　薔子さんも、あの、起きてる時に、手紙、頂戴。

女　うん。

男　あの。年に一回か二回かは、帰って来れると思うんだ、日本に。それで、その時には、必ず会いに来る。あ、勿論、薔子さんが厭でなければ。

女　うん。待ってる。

男　あ、うん。

女　一年とか、すぐだから。一回か二回寝れば、会える。
男　ああ、うん。
女　夢を見ながら、待ってる。
男　うん。あの。じゃ、また。
女　うん。また。
男　じゃ。

男、去る。
女、顔を覆う。
少年探偵団が登場する。

小林　行けるよ。
井上　行ける。
薔子　え？
野呂　タイ。また、夢の中の海を潜って。
小林　だから泣かないで。
女　泣いてない。でも夢の中でさえ、殆ど何処にも行けない。誰も私のことを夢に見ないから。
井上　そんなことないよ。
野呂　小野君は薔子ちゃんの夢を見るよ。
女　忘れるよ。ゆっくり少しずつ忘れていくよ。学校の友達やお父さんやお母さんと、同じ様に。
小林　時々、思い出すよ。
女　こんな所で眠り続けるなんて、厭だ。私も外へ出たい。
野呂　じゃ、出ちゃう？
井上　ちょっと、野呂君、気軽になに言ってるの。
野呂　夢の蔓を外に向けて伸ばし、葉を茂らせるんだ。世界中を薔子ちゃんの夢で覆って、窓の向こうで動き回る人たちから、ほんの少し養分を分けて貰えば良いんだよ。
女　そうなの？
小林　それは駄目だよ、薔子ちゃん。
野呂　でもそうすれば、立って、動いて、どこにだって行けるじゃないか。薔子ちゃんばかり不公平だよ。
小林　ちょっと、野呂君、何言ってるの。それ自分が外に出てみたいだけでしょう？
井上　でも、それはあるよね。
野呂　ね。
小林　ちょ、井上君も、誘惑に弱すぎるよ。

野呂　薔子ちゃん、行こう。

女、迷っているが、立ち上がる。

唐突な暗転。

電話の音が幾つも重なる。

その音に紛れて、無線通信の声。

声　応答してください。応答してください。イッスイ市役所、イッスイ市役所、応答してください。

声　昨夜からイッスイ市との連絡が一切途絶えています。イッスイ市周辺は、海側の新イッスイ駅を中心として同心円状に、茨の棘に包まれ、市外からの侵入を困難にしています。イッスイ市からは、電話、無線その他のいかなる通信によっても、応答が一切なく、イッスイ市内で何が起こっているのか、全く掴めておりません。現在は警察及び軍が周辺を捜索している状態です。

声　今日午前九時三十分に、イッスイ市に突入した警察隊十名が消息を絶ちました。第一隊突入三十分後に第二隊が突入予定でしたが、現在は中止されております。テロや人体に有毒なガスなどの可能性もあり、イッスイ市周辺は膠着状態です。テレビ局各社や空軍もヘリコプターでイッスイ市上空の映像を蒐集していますが、今のところ人影は全く見当たりません。

○二十三、タイ

タイ人1、2、3が登場する。

各々、タイっぽいパントマイムにて、

タイ人1　サワディー・クラップ。

タイ人2　アーユ タォライ。

タイ人3　トム・ヤム・クン。

タイ人1　チャオプラヤーは今日も雄大だね。

タイ人2　ジャパンから技師来ても、チャオプラヤー、変らない。

タイ人3　スワンナ・プーム。

タイ人1、スマートフォンを取り出す。

タイ人1　チャオプラヤーは変らないけど、ジャパンで変な事件起こってる。

タイ人2と3、覗き込む。

タイ人2　トック・ジャイ。何これ。
タイ人3　ココナッツ・ミルク！

男が登場する。

男　それ何。何処？
タイ人1　日本人技師。顔色悪いよ。
タイ人2　チャオプラヤー見て心を静めよ。
男　その事件、何処？場所！
タイ人3　サムロー・トゥクトゥク。
タイ人1　イッスイ市って言ってるよ。
タイ人2　イッスイ市がジャングルになってるそうだよ。
タイ人3　セパタクロー。
男　行かないと、俺。
タイ人1　日本は遠いよ。
男　夢の中へ。薔子ちゃんの夢の中へ。川が海へつながり、全ての海がどこかでひとつに交じり合うなら、僕も夢の中の海を通って、彼女の元にいけるはず。
タイ人2　どうやって？
タイ人3　ムエタイ。
男　眠るんだ。深く。僕も。薔子ちゃんと同じくらいに。

男、走って退場する。

タイ人1　日本人！何する！
タイ人2　飛び込み禁止！
タイ人3　ナンプラー！

タイ人1、2、3、男を追って退場。
水飛沫の音。

○二十四、病院前の公園
女と少年探偵団が登場する。

小林　歩きにくいな。
井上　あちこちに人が倒れてるから、踏まないように気をつけないとね。
女　そうだね。
野呂　茨のトゲ怖い。
女　ここ、この公園、いつも窓から眺めてたんだ。いつか絶対ここを散歩しに来ようって思ってた。

一瞬の暗転ののち、すぐに明転。男が急に上から降ってきた体で倒れる。
呆気に取られる、女と少年探偵団。

女　何？！

男、腕などを押さえながら、

男　痛―。痛―。痛―。
女　小野君？
男　あ。薔子ちゃん。
井上　パンチの効いた登場だね。
小林　君、誰？
野呂　薔子ちゃん、知り合い？
女　友達の小野君。
男　うわっ。ここ、茨が？
小林　ああ、大丈夫、この辺一体、皆こんな感じだから。
男　それ一向に大丈夫じゃないよ。
井上　どうして君は眠ってないの。
男　眠ってるよ。

椅子に座って眠る父と母が登場する。
女、父と母に気が付く。

女　あ。
小林　あれ？これって、薔子ちゃんの？

女、母の肩に手をかける。

女　お母さん。お母さん。

母、椅子から降りて、下に座る。
男と少年探偵団、椅子にまだ母が座っている感じで、母と椅子に交互に目をやる。

小林　あ。薔子ちゃんのお母さんが二人に?!
井上　お母さんの見ている夢だ。夢の中の自分だ、これ、きっと。

母、人形に話しかける。

母　あのね、しょこたん、この間、雑誌のアンケートで「セクシーさを感じる異性のしぐさ」って記事を読んだの。それでね、「真剣に仕事をしている姿」と「髪をかきあげる」が上位に二つ続いてあってね、それは、どう考えても金八先生よね?!ね?お母さん、金八先生のことセクシーと思ったこと一ミリもないけど、考え方の違いかしら?お茶の間や三年B組では「皆さん」て金八がこうしながら（と、金八先生が髪をかきあげる真似をする）言うたびに、「セ、セクシー過ぎるだろ?!」みたいな感じになってたのかしら?どう思う?
男　のどかといえばのどかな夢だな。
野呂　夢に見るほどそんなことが気になったんだね。
女　どう思うって言われても困るけど、多分金八先生、セクシー売りしてないと思うよ。

母、女に気付く。

母　え?
女　お母さん。
母　誰?
女　誰って。薔子だよ。
母　え?だって薔子ちゃんはここに・・・

母、人形を見詰める。

女　それは私のお気に入りだったリリーちゃん。そんなの、まだ持っててくれたの?

母、女と人形を見比べる。

母　薔子ちゃん?
女　うん。

母　ああ、そう。そうか。随分背が伸びた？
女　ああ、まあ。
母　あの。これ。

母、人形を女に差し出す。

女　ああ。ありがとう。え、なぜ振り袖？
母　成人式だから。
女　それ、私でしょう。
母　うん。そうだね。
女　何それ。変なの。
母　変かな。
女　お母さん、一緒に水族館に行こう。
母　え？何、急に。
女　水族館。前に、約束したでしょう？いつか一緒に、鯨を逃がしに行ってあげる、って。だから今は、とにかくお父さんに謝りなさい、って。押入れの向こう側で。ねえ、約束したでしょう。ね。
母　でも。

母、躊躇っているが、女は母の手を引っ張り歩き始める。
父が目を覚ます。

小林　あ、お父さんも二人に。
井上　なんか、気持ち悪い現象だな。
男　もっと発言をオブラートに包んで。
父　おい。何処へ行く気だ。
女　水族館だよ。
父　また鯨逃がすとか、馬鹿なこと言うんじゃないだろうな。

母、おろおろしている。

女　馬鹿なことじゃない。
母　薔子ちゃん。
父　何だ、その言い草は。

父、女を叩こうと手を振り上げる。

女、すかさず小林のポケットから拳銃を取り出し、父に向けて発砲する。

男　ええ?ええええ?！

しかし、父、素早く避ける。

男　ええ?！

父も拳銃を取り出し、反撃する。女と父、物陰に隠れてしばし銃撃戦。
物陰役には少年探偵団が扮する。
女の弾が先に尽きる。
父が不敵な笑いで女に銃口を向け、引き金を引くが、母が女の前に立ちふさがり、
代わって撃たれる。

女　お母さん。

母　ようやく、代わってあげられた。

母、倒れる。
女は銃を捨て、父に殴りかかる。父も銃を捨て、肉弾戦となる。
互角の良い勝負。
各々、一発ずつ相手からの攻撃を受け、互いに倒れる。
二人、荒い息で離れたまま、

父　やるじゃねえか。

女　いつもいつも力で勝てると思わないでよね。

父　言葉じゃ、勝てねえもん。

女　勝とうとしないでよ。

父　じゃ、どうすりゃいいんだ。

女　勝ち負け関係ないでしょう。口で言いなよ。

父　苦手なんだよ。

女　苦手でもだよ。殴るの、やめてよ。

父　最近は、そうでもねえよ。

倒れていた母、起き上がる。

男　ええ?

母　さあ、二人とも、仲直りして。

母、父と女の手を取り、繋がせる。

男と少年探偵団、思わず拍手する。

父と母、女を残して椅子に戻り、再び眠る。

小林　薔子ちゃんの夢、見てるじゃないか。

女　私の夢じゃないよ。金八先生の夢だよ。

井上　違うとまでは言い切れない。

女　早く行こう。

男　どこに？

女　水族館。

○二十五、水族館

女、男、少年探偵団が移動し、水族館。

着いた途端に、女がはしゃぐ。

女　わー。わー。わー。マンボウいるよ、マンボウ！！うわ、あの赤いの何？

小林　え？水槽の中に、何かいる？

井上　何？

小林　あれ。

女　なんだろう。新種の魚？

男　人っぽいな。

野呂　水槽だよ？

小林　それに、イッスイ市内の人は、皆眠っているはず。

女　随分大きいね。

男　いや、人だよ。

井上　うわっ。

野呂　出てきた！！

びしょぬれの看護婦が登場する。さかな君のような帽子をかぶっている。

看護婦　やあ。驚かせてしまったようだね。

女　看護婦さん？

男　何してるんですか？

看護婦　ふふふ・・はははは・・・。

看護婦、高笑いで仮面を取る振り。自分で「べりべり」と擬音を入れる。が、振りだけで顔はそのまま。

男　え？何も起こってませんけど？

看護婦　いろいろな事情で、今、素顔を見せることは出来ないが、私だよ。小林君、井上君、野呂君。

言いながら看護婦、帽子を脱ぎ、別の帽子（ソフト帽やパナマ帽など）をかぶりなおす。

小林　まさか、明智先生！！

男　ええ？どこが？

女　え？私、名探偵に看護されてたの？

男　気掛かりはそこ？

少年探偵団、明智に駆け寄る。

井上　本当だ。

野呂　先生、何処に行ってたんですか。

看護婦　心配掛けて済まなかった。世界の裂け目から逃げ出した二十面相を追うと共に、世界の裂け目の修理方法を探していたんだ。

小林　すごい！！

井上　そういえば先生、水道管の裂けたの修理するのも上手ですもんね。

野呂　それで、見付かったんですか。

看護婦　見付かったよ。夢と夢とを繋ぐ海の底に、一本、管が差し込まれている。そこから夢がもれ出し、世界の裂け目になっている。修理するには、先ずその管を切り、穴を塞がなければならない。

男　あの、それって。

小林　二十面相は？

看護婦　外の世界で、謎の円盤を飛ばしたり蛍光塗料をぬって夜の町を出歩いたり、ワイヤー等であたかも透明の人間が動いているような物体を夜道に出現させたりして、小さく世間を騒がせてるよ。

井上　小さくか・・・こっちの世界でなら一面トップの大騒動なのに。

看護婦　外の世界に出てしまうと、二十面相はただのトンチキな青年になってしまう。そ

れは阻止したい。だから、世界の裂け目を修理する前に、二十面相を連れ戻してくるよ。

小林　僕らも行きます！

女　え？

井上　えっ？！

小林　行くよ？

井上　あ、うん。

野呂　い、行きます。

女　鯨は？

小林　ごめんね。今は、世界の修理の方が先決だ。

女　えー。

看護婦　しかし外の世界は危険だぞ？

井上　えっ。

野呂　えっ。

小林　構いません！！ね！！

井上　あ、はい。

野呂　はい。

看護婦　分かった。では急ごう。遠眼鏡を使うんだ。小林君、そこの地味な青年に双眼鏡を貸してやってくれ。

小林　え。あ、はい。

男　枕詞が余計です。

小林、男に双眼鏡を渡す。

看護婦　いいかい青年、双眼鏡を逆さにして僕を見てくれたまえ。薔子君もだ。僕らだけではいけない。必ず窓の向こうの景色もしっかり遠眼鏡に写しこむんだ。

男　あ、はあ。

看護婦　青年、また会おう。予告状を出してタキシードで登場するタイプの怪盗や、夜中に動き出す人形や、透明人間が起こしたとしか思えない盗難事件の時には、必ず現れて謎を解くよ。

男　あ、はい。ちょっと、僕の日常にはない感じのシチュエーションですけど。

看護婦　では、さらば。

男と女が双眼鏡を逆さに覗きこむと、男と女を残して舞台は暗くなる。

男　さよなら。

女　バイバイ。

男と女、しばらく手を振っている。
舞台明るくなる。

女　行っちゃった。
男　あのさ、水槽の上、飼育係が餌をやれるように、開いてるよね？
女　え？ああ、うん、多分。
男　じゃ、上に行こう。

全員が移動すると、水槽の上。
男が魚を捕る網を、女がバケツを提げている。

女　良いのこれ、勝手に持ってきちゃって。
男　借りるだけ。あとで返すよ。

二人、水槽を上から覗きこむ様子で、

女　落ちたらどうしよう。
男　普通落ちないよ。
女　落ちたらマンボウと華麗に戯れるようにして泳げるかな。
男　そういう心配？
女　他にどんな心配が？
男　薔子ちゃん、こっち側から水槽を覗いて。

男、双眼鏡を逆さにして覗く。女もその後から覗き込む。

男　えいっ。

男、双眼鏡を覗きながら、網を動かす。

男　バケツ！！
女　あ、はい。

女、男の網の先にバケツを差し出す。
男、バケツに魚を入れるしぐさ。

女　入った！！小さいけど、鯨だ！

男、その作業を続ける。

女　あ、イルカも。小さいけど。

男、しばらくその作業を続けるが、

男　まだいる？

女　もういないみたい。

二人、バケツを覗き込む。

女　変な感じ。

男、バケツを女に渡す。

男　海に帰してやるんでしょう。

女　うん。

二人、場所を移動する。

○二十六、病院前の公園

女、バケツをゆっくり傾ける。

女　バイバイ。元気でね。

男　他の魚に食べられちゃわないかな。

女　それは、自然界の淘汰。

男　大きさ的に。

女　そこは、もう、頑張ってもらうしかないよ。各々。

男　うん、まあ、そうだね。

女　自由になったかな。

男　そうだね。

女、海に向かって叫ぶ。

女　頑張ってねー。

女、男に向き直り、

女　あのね、お願いがあるんだけど。

男　うん？

女　友達と・・・多分友達だった子と、約束したんだけど。飛行機を見るたびに手を振るって。

男　ああ、うん。え？それはどういう？

女　その子、飛行機が好きで、乗りたいって言ってて、で、飛行機を見たら、手を振ろうね、って。

男　ああ、うん。

女　小野君、私の代わりに、それ、お願いして良い？

男　あの。あの、一緒に。俺がね、一緒にいても良いんだ。ここに。ここにこうして、ずっと。だから、あの、他の人は、イッスイ市の他の人は、放してあげてくれないかな。

女　良いよって言いたいけど、もう伸びちゃったから、自力ではどうにも。

男　え？！そういうものなの？

女　うん。切れば大丈夫。

男　あ、そうなの？

女　うん。あと、小野君も、ちゃんと元の場所に戻った方が良いよ。

男　あのね。ずっとここでこうしていても、別に良いんだ。特に、やりたいこととか、そういう、夢とか希望的なものもないから。

女　死んでも良いから、面倒だから、私といてくれるの？

男　いや。あの。そういうあれじゃなくて。あの。そういう、あれじゃ、ないんだ。

女　どれ？

男　えーと。君といると、月が綺麗だ、っていう、

女　一緒に月見たことないよ。

男　いや、君といると月が綺麗だって、夏目漱石が言ってて。

女　夏目漱石が？

男　うん。

女　え？誰に？小野君に？

男　いや。文豪と友達じゃないから。英文和訳。英語教師だったから。

女　え？そうなの？夏目漱石は英語の先生だったの？

男　うん。割と有名な話だよ。で、その、名訳。と、少なくとも、俺は思う。薔子ちゃん

といると、月が綺麗だ。
女　ふーん？
男　だから。

男、女の手を取ろうとするが、舞台の隅に父と母が登場する。

父　薔子。
母　どうしたの。帰りましょう。

女、男に、

女　小野君。飛行機見たら、手を振ってね。

女、はさみを取り出し、腕を捲って自分のチューブを切る。
女、ゆっくり舞台の隅まで歩き、父母と手をつなぐ。
男を残して突然舞台暗くなる。

○二十七、タイ

男、倒れる。が、タイ人1、2、3が登場し、バスタオルを持ったタイ人1を中心に、男を支える。

タイ人1　日本人！
タイ人2　日本人！
タイ人3　ワット・ポー！

男、目を覚ます。
舞台は明るくなる。

男　あ。
タイ人1　何をやってるの。
タイ人2　なぜチャオプラヤーに飛び込む。
タイ人3　アホナ・ノ？

タイ人1とタイ人2、タイ人3に一瞬注目するが、すぐに戻る。

男　ああ、うん。
タイ人１　もう夕方だよ。ずっと気を失ってた。
男　茨は？イッスイ市は？
タイ人２　日本人が寝てる間に、町を覆った茨一面にバラが咲いたよ。
男　バラが？
タイ人１　でも一瞬にして枯れたっていうニュースが流れたよ。
男　枯れた？！
タイ人２　実はＣＧだった説がネット上で有力よ。
男　枯れたのか。
タイ人３　プーケット。
タイ人１　今日、全然仕事にならなかったね。
タイ人２　明日からは、もうちょっと気を引き締めて頑張って欲しいね。

タイ人１、２、３、去る。
男、ひとり残される。葉書を取り出し、読む。

男　僕がタイに行って一ヵ月後、笛木先生から葉書が届いた。絵葉書で、一面バラの写真だった。文面は一行だけで、薔子ちゃんの死を知らせるものだった。僕のマンションの部屋からは、チャオプラヤー川が見える。チャオプラヤーの水面が薄オレンジ色に染まってゆくのは実に見事で、葉書を貰ってからも、その美しさは一向に揺るがず、今日も日は暮れて、今日も世界は美しくて。これは、これは多分、慰めってものなんだろう。

暗転。

○二十八、病院前の公園
明転すると、母が真っ黒なワンピースを着て座っている。

母　あら。
女子高生　あ、どうも。
母　よく会うね。
女子高生　仕事帰りですか？
母　ううん。レストランは、やめた。
女子高生　え。
母　今日、さよならを言いに来たの。病院に。病院ていうか・・・この景色に。多分もう、二度とここには来ないから。娘が死んだの。

女子高生　え。
母　先々週。
女子高生　あ、それは・・・。
母　だから、もう病院を眺める必要はなくなったの。八年入院してた。変な感じ。悲しいようでもあるし、ほっとしたようでもある。酷い母親かしら。

女子高生、強く頭を横に振る。

母　ありがとう。あなたは？病院？
女子高生　いや・・・なんていうか・・・私も、もう病院と関係なくなったから、お別れに。病院に。
母　気が合うね。
女子高生　はい。
母　多分、娘が死んだ日なんだけど、その日、夢を見たの、娘の夢。手を繋いで、海に行くの。娘は小学生になったり二十歳になったりで、形は定まらないけど、すごく楽しそうだった。そして、三人で貝を掘ったあと、娘は「バイバイ」って、海に飛び込んで何処までも何処までも泳いでいった。

母、空を見上げて、

母　ああ、飛行機。

女子高生、それを見て、手を振る。

母、微かに笑う。

母　何してるの。
女子高生　何となく。手を振らなきゃいけないような気がして。
母　そう？

母も一緒に手を振る。

暗転。

終わり